鶴岡傳内傳

写本

洋学文庫
文庫8
A 349

43-7210 (16)

よろづ咄家元
露見傳内

下 ○軍談

いろは姓
○清水新瑣印　深尺八指南　山呂佐仲之攷

新古京京町二丁め
山本屋の亭主助兵衛

日八捻催掛
猿山

い 新述
○秋篠

六人なれとも実ハ三人にてよろし

紀州の武士に雲鶴呉傳内といふもの有り享保の
初め和歌山にありしが後々に百俵を領し獨身
にて家来壹人召仕ひけるが平生質朴にして儉約
せし故金銀多く貯へ居けるに五月中の事なりしが
夏の貸米を受取り來りて簞笥の中へ志まひ置けるを足
輕といふもの見付て心を迷はし何卒あの金を
盗みとらむやと心を巧み主人傳内に酒を多くすゝめ
よく〱沈醉させ寝屋を鎖りて熟寝させ夜更て

浪沈酔の侍田を故存のあとより刺殺し金銀ことごとく
奪ひ取衣服大小などに至るまで欠落しける他者
ものなるゆへ何方へ欠しにや知れず侍田も猶弁
まのあたり殺されしを夜中にてあるものなれば夜あけて
浪に所に不よりみ附て大きに驚き目付中へ訴り検使
来りて殺したる人を詮議するにすこしも中間軍兵衛
へし大不届至極なりとおさがせそて方々尋しかど行衛
其後侍田の死骸をもとめられて殺されしぞと誰が仇

詮議すれども誠に本意なき次第にて後に清水
新次郎といふ小姓組のもの露見となりそめの念友
ありしが侍田横死の海にて殊に絶殺されしぞんと存り
詮議もあれども誰あつて仇を殺すべきものは程なく
我がものとなりて念友として打連立て並べきにあれと
思ひ書付を認め所帳を取出し
松平何某来りて厚恩山のごとくなる存[illegible]
此度兄分露見侍田が人々殺されしは何とぞ恩ぐらく

右之條ハ是ニ付々一旦他新中存を得ハ御修行可被成候
右新上ハ去院其く右段被右新上ハ以上

月日

清水新次郎

御同行中

右之通新ひしつ尤ありとて御帳内より出されたかねく
周悉せずして新規中たる人何れも出しが軍竜他流の者
といへども其身の心家業ことをあらたまつ江戸へ下り此水
の中をさかしもとめんとたるく江戸に出て浅草尾町に

長尾かうし名を山名左仲と改め年はおくさきに覚へし
尺八を指南して波軍竜が流れをさかしむる心の内こそ
やさしかりけれ
かつて清水氏浅草に仮住居して居られたる近所の人
寺の心やさしく遊ばれ或時夕暮に人をまねき今観世音が
光乳山かのぼり出井も座敷の隅田川原に立よりそれ神ん
とあり河原ここかしこをみめくりのやしろにあゆみしく暮に
おもひ本所をも新吉原五町甲をさして東町二丁目山崎

助太郎ハ方へ行處ニて遊んと清水を勝山の引造ニ
秋篠といふにあひそめけり
此勝山といふ傾城ハ格別風雅なる女なりされも
今町の女と髪せふに勝山といふ風ハ此勝山の仕初
めしこのまゝ遊女にまことある貞心にて秋篠の生れ
つきよきに思ひ尚に正路をもつて在せしそこ
たゞかりそめの仇枕と思ひしに立ゆふにおなもなく ふし
ぬかくまゝ清水も秋篠心底をかさめ投道のまゝ

吉の神の東ゥけゝく加已ぬ中に有りにけり毎夜
彩次郎ハ山本庄へかよひ百夜車のくるくると廻る役日に
秋篠ゝ晴ひにく彩次郎へなさけ深くそあひにけりあるとき
秋の夜の中に二人ハ方山のたはむれ行末をいかにほとて秋
篠か申すハぬし目出の上何とせしか人家にれ何やらん大望
ありさうに見え文字をかく年月なれしこなたの心底何と
たまされ隠しぬるハとめしく心中見せしと申されむ彩次郎
ゆゑくあやく国をいやなる人ゝあいゝかにもあるものかなる上ハ

何をか隠さん我兄ハ若殿思侍内とて云許ニ於て
下人軍兵といふものニ討れし軍兵次第しらす丈内へ不足
此唯今請て仇討ニ出る軍兵ハ皆是其のおもて一下まづ亀
を尋んと相も此度ニ下り此月日を合し刑罰しる時をもし
ぬるなといふを秘深をしめて驚きさていた事ふ所せさうち
是第く物語し然るも聞くるにハ方人の入込ニなれども
それと相わしきものあるも告きに生と中する秘説守
兵軍兵といふるかなしくの男ハ年ころ有りかたりかくめぬく

とくとしく語り合剰こる秘深もとくとゆるけ兵衛ハ
とけるくおしとこ床をとりさとりとさとを天命のくとをる不
此弥波下人軍兵本当下総へ立帰り其後江戸へ出て太
の金子をもの〻く身をかくり由緒ある浪人らしく拵へ三谷
今戸瓦屋ニ居るニ小家をかまへ近所の人々ニ少年とて吉
原へ入込武藝をくつへとせ指南しくあるも家居
助太夫の此が実子とありあるとき助太夫かの軍兵を同道て
我家へ来りけるを秘深ハ心つきて是ぞ新坂大夫中の姿

似たりと見へ然してかの新羽中方へ十七騎の清水ハ急き
来り秋篠に對面をなし委しくの旨をかたりしかハ新羽中
飛立いさむを秋篠とゞめてしばしまちたまへ今ハ
奥ふかく大勢へこごれて源蔵前中なきを告る
不一君なるハ必定なり思ひしと所を宿なさしれはよるに計ふ
へしぬけ目もなくよしハ我郡屋へとゆき玉へといふに新羽中も
何茂村の庄屋を友に頼りて何の気なき様にそてなし
翌日居風呂へ入りての時秋篠新羽中を客なしの

去年より伺ひ見るに軍蔵に縄をかけ友を求むるにかく
放翔字旅人屋しに兵ハ仕方なくて則軍蔵のかへりをまち
語より静につれ帰りし橋場町の小家へ連れ入れ置込
大音にいふに軍蔵天命のかぎり知れ本露見侍る
が敵なるへとさゝつめりけなりしに軍蔵驚き大いに恐れ
侍由の第や子息なし何者なるぞ敵討といふぞといへば
清水ハいとくきを見へ念して見覚あらん我こそ露見が
今友契りて兄弟となる上ハ清水新羽中兄の仇と名のり

刀に手をかくる軍蔵声をかけ押留なり我も今武芸
を業とせざれども一まハ以つされ併に夜ゞ人目多く捧口
杯のさまさけなり家主障屋へ世話うけて益なし幸ひ
の森ハ橋場縁泉寺ていへる寺あり庭に入てかの寺の内
にて勝負せよへしと約束し忍て互に待遇へしとかたく約せ
故に軍次申しかり家へ帰りける兄若しま〻取てもさに付ぬ
へしとて当遠ぎ出よとをやつてさありもののゆゑにとどめられむ
軍蔵ハかねてをのれ考へて約束をかためしそのや

頃て清水ハ縁泉寺へいそぎきたりて喜の日のをそくゆゑぐ
暮るゝに目もあてられずちゝと山本屋兄世とよ川則秋篠
にあてられぬやれるハきのふとも今朝よりこそこの心をも諜
かたらぬ契りをいかなせしことぞおもへる去の縁なる一しぬるに
我を今軍ハ死ぬと出合し兵運ハ天に任せたる不幸とも我
そしらぬまけ命を落されなりとも今よの契りかなうまじ命
日ごろハ念仏してたのまれぬ頼の人の多数万数よりそなこの
一遍の念仏をも唱しためていつまでもむ秋篠やくこと

いましきまでありかよひくる客ことに勤めのなさけ以て
呼ひしといろ〳〵手くだを尽し偽りを以てハ私ニかまへれ
遊女傾城のならひなりさるを未来も是ハ此世の内ハ命
ながらへしといつはりて何ニ誠中へき遊女のまことを
誰ニ知らし白ハおろかなり此習彼人と勝負なされ短慮
切らるゝ女さへ何しニ淫事つゝき逢ふ客ことに精進して傾城
の涙のまぬ日ハ一日もあらざりけれバおかしきるすをのさまにと
笑ひくやれいれも清水あまきとて悔き傾城おのれよく

今日よりいつまでもあきむきしてハ以の外に立腹しあれば
詮方なくせき立て急場をも立帰りもとも浅草なるの
初更を過ぎれどもやくそくの如く総泉寺の門前松原へ
桜来るの末軍兵見へ来りしがやがてあつまり来る新選中築
しかとは先刻より待居たる神妙に来る新撰中築しやと
以上先刻より待居たり ものゝないさ勝負せんて立寄いふに
軍兵義ハ侍内が常ぶん清水新選中築見の敵思ひたれ
と切るゝ所に覚えりとうけ流さぎ立上て秘術を尽して戦ひ

ける。雪晃ハ元来達者なれども、是れハ新江戸定太刀
なりしに、かゝる所へ縦泉寺の方より小姓共ばら
後口より走りて切かゝりけるを、ふりむく処を清水
たゞ一討に切ふせけるを、とめをさして清水ハかの小姓ばらを
そのまゝ向ひ中なるハ、さしも名高き雪晃を助太刀なされしぞかの
もの盛へまつくめてこゝに本望を達しけるといふを少しも
山本の遊女秋篠なり。新江戸大きに驚きこゝにてハ
先程對面せし時ハ不實のことを申のこしなりしが今又

かくの如き心得あるゆへなれも、秋篠こゝにてさゝえ
にてはなゝ一旨に城の苦海なるによりかなきものとなりし
也。秋思ひしハあの心よりこの心にては敵の討得なきまじと
思ひたけましき気色とぞあいそつかしを申しまゐりて、心
をとあらく此まゝ由とぞかつに客の太刀を奪ひ郭を逃出してかく
のごとく為ひしをは申されども清水大きに感心して悦びけるを
聞また稲生も聖庵へ届けられしもいきひに吟味済まさ
絶物へ行ゑしに至る所となりしさて秋篠をハ絶物の大宗が

請出して清水が妻に下されける新助夫婦の中むつ
まじく後に男子二人をまふけ惣領ハ八百石に下され伝内
孫式部事なりし露路伝右衛門事といふ次男ハ清水が家督を続
して清水新助事といふ誠に信実の目出度事かくの如く
ありまじく人ここにかゝる目出度しを見るなるべしと云ふ